

「琉球家譜」テキストデータベースの作成

豊見山 和行：琉球大学教育学部

琉球家譜の大きな特徴の一つは、士族の個人に関わる公文書という点にある。すなわち、1689年に首里王府内に常置の部署として系図座が設置され、士族の家譜を編纂する体制がとられるようになった。それ以前にも数回の編纂が行われたが、体制的に家譜を編纂し、その後、記事の追加(仕次<しつぎ>という)を裏付けとなる資料を元に編纂されたのが家譜である。家譜は二部作成され、一部は系図座、一部は当該家で所持されていた。

家譜は、士族の居住地によって分類すると沖縄本島(首里系・那覇系・泊系・久米村系)と先島(宮古系・八重山系)に分けられ、さらに王府の認定を受けられなかったものの独自に家譜を編纂した久米島系家譜がある。ちなみに宮古・八重山での家譜編纂が許可されたのは1729年からであった。

1985年から89年の4年間、現存する琉球家譜の全体状況が調査され、『沖縄の家譜』(沖縄県文化財調査報告書 第90集、沖縄県教育委員会、1989年刊)として刊行された。それによると、沖縄本島家譜266冊、宮古家譜39冊、八重山110冊、久米島家譜8冊が確認されている。上記報告書には、書誌的情報、所在情報も記載されており有効である。

かつての琉球王国時代における家譜の存在状況は、沖縄本島家譜に限られるが、「光緒二十年」(1894年)成立の『氏集 首里・那覇』(那覇市史編集室、1976年刊)によって知ることができる。その奥付には、「調部人旧御系図座筆者足・屋嘉比里之子、同・多和田筑登之」との署名があり、全体で「惣合二千八百九十一冊」と記されている。しかし、同書の解説(源武雄)によると実数は、2,865冊で26冊のずれがあるという。ともあれ、沖縄本島だけでもかつて存在した家譜のほんの約10パーセントしか確認・収集されていないことが理解されよう。

家譜の史資料的価値について全体的に研究した専論としては、田名真之氏「琉球家譜の成立と意義」(初出1979年、田名『沖縄近世史の諸相』1992年、ひるぎ社、再録)がある。家譜の史料としての有効性と限界について極めて的確な分析がなされており、もっとも基本的な論考と言えよう。その他、前述の『沖縄の家譜』にも概括的ではあるが、以下の論考が収められている。

金城正篤「沖縄の家譜について」

田名真之「首里・那覇・泊系家譜について」

小渡清孝「久米村系の家譜について」

島尻克美「宮古系家譜について」

崎山直「八重山系家譜について」

上江洲均「久米島の家譜について」

中村誠司「山原の家譜—その背景・士族の移住を中心に—」

家譜は、士族の個人情報という限界性を有しているものの、利用の仕方によっては細かな事項を検

索することも可能である。さらに、近年では家譜は歴史学の分野だけでなく、人類学の親族研究、料理史研究などからも注目されるようになっており、多様な活用が行われつつある。

本領域研究による「琉球家譜」のデータベースは、基本的に『那覇市史資料篇』で刊行されたものに依拠し、以下のデータベースを作成した。

『那覇市史資料篇』(第1巻6「久米村系」)

『那覇市史資料篇』(第1巻7「首里系」)

『那覇市史資料篇』(第1巻8「那覇・泊系」)

上記家譜は、のみは「桐」版のデータベースを作成し、さらに全体の はフルテキスト(テキストファイル)データベース版を作成した。

本データベースは、文字情報を基本としたため、世系(家系)図部分を省略した。ただし、桶谷猪久夫氏による「琉球家譜の情報化」によってインターネットWWWでは、世系図部分を画像として提供しているので参照することは可能である。

なお、外字は 印で前後を囲み、例えば 艸辛 などとした。なお、外字処理については、桶谷氏 <「琉球家譜」の情報化と漢字処理>を参照していただきたい。

「久米系家譜」テキストデータの一部。

王姓 家譜

紀 録

五世正議大夫諱裕之(小渡親雲上)

童名眞徳字能容號安仁行二康熙二十九年庚午十一月二十七日申時生乾隆十七年壬申八月初二日卯時卒壽六十三葬於海藏院後山墓

父可法

母梅氏

室蔡氏眞鶴金康熙三十年辛未閏七月初三日生乾隆四十年乙未十一月十九日申時卒享年八十五號窈淑

長男三 金易

次男三徳(兄三 金易 因生子早亡統系之絶稟於朝廷以繼其統)

三男三秀

長女眞鶴康熙五十三年甲午九月初三日子時生

次女眞龜康熙六十年辛丑八月十七日亥時生雍正五年丁未五月二十日死享年七

三女眞滿雍正三年乙巳九月二十一日生

四女眞那武樽雍正九年辛亥九月十八日亥時生乾隆四十四年己亥十一月十二日亥時死享年四十九

官 爵

康熙四十年辛巳八月十六日為若秀才（賜年俸米五斗）
康熙四十三年甲申八月十六日結欵髻拳秀才（賜年俸米壹石）
康熙五十六年丁酉六月十五日陞通事（賜年俸米貳石）
康熙五十九年庚子三月十二日擢黃冠（賜年俸米貳石五斗）
雍正四年丙午二月初二日擢當座
雍正五年丁未十二月初一日陞都通事擢座敷
乾隆三年戊午六月十二日陞中議大夫
乾隆五年庚申六月十五日陞正議大夫
乾隆十三年戊辰六月十五日擢申口座

勲庸

康熙五十六年丁酉九月初八日為讀書習禮事隨接貢存留通事紅土顯伊差川親雲上十月十五日那霸開船十一月初一日久米山開船初五日到 門虫 己亥五月二十九歸國

康熙五十九年庚子三月十二日奉 命為訓誥師（賜年俸米貳石勤職三年）

雍正四年丙午二月初二日奉 命為進貢二號船通事十二月十一日隨耳目官毛汝龍田里親雲上盛武正議大夫鄭廷極宇地原親雲上那霸一齊開洋翌年丁未正月初五日古米山開洋初十日到 門虫 公事已竣六月十五日五虎開洋二十日歸國

雍正五年丁未十二月初一日奉 命為講解師（勤職三年賜隨職年俸米貳石五斗）

雍正十年壬子二月初九日奉 使為進貢二號船都通事十一月二十九日隨耳目官溫思明森山親雲上紹高正議大夫鄭儀池宮城親雲上那霸一齊開船十二月二十二日古米山開船本月二十七日到 門虫 翌年癸丑八月十六日五虎門開船無順風難一直去因此漸々到温州海島北關候風十月二十一日開船十一月初一日歸國

雍正十一年癸丑十二月十四日奉 命陞長史司（賜役知二十石）勤職四年

乾隆元年丙辰二月初三日奉 使為進貢貳號船都通事十月二十三日隨耳目官毛光潤野里親雲上安年正議大夫鄭國柱屋部親雲上那霸一齊開船十一月初四日在馬齒山開洋初十日到 門虫 翌年丁巳八月初八日公事已竣五虎門開洋二十一日歸國

乾隆四年己未九月十三日奉 命在於南風御殿裕之隨御書院奉行向氏國頭親方朝齊等（裕之以中議大夫管奉行職）始管

皇帝御書永祚瀛 土需 四字臨寫作牌 匸扁 至于十二月初二日報竣

乾隆九年甲子十二月十八日奉 命為久米村惣與頭

采地

乾隆四年己未十一月十五日拜授恩納間切名嘉真地頭職

乾隆十五年庚午十二月二十日轉授摩文仁間切小渡地頭職

寵榮

乾隆四年己未九月十三日奉 命在於南風御殿隨御書院奉行向氏國頭親方朝齊等始管皇帝御書永祚瀛 土需 四字臨寫作 匸扁 歷額至于十二月初二日報竣因此本月二十五日

國主召賜宴於御番所獎賜上布貳疋於下庫理御座

婚嫁

長女眞鶴適鄭允迪大嶺里之子
長男三 金易 娶班氏外間筑登之親雲上守氏之長女思戸金
次男三徳娶正議大夫梁珍龜島親雲上四女眞鶴
次女眞滿適陳天鳳幸喜秀才
三男三秀娶中議大夫金宏安次嶺里之子親雲上三女眞鶴再娶魏氏高嶺里之子親雲上宗
絢長女眞鶴三娶林大模新垣通事親雲上三女眞龜

六世三 金易

童名思五良字君榮號日章行一康熙五十七年戊戌三月十七日寅時生乾隆二十六年辛巳三月十九日辰時卒享年四十四葬于海藏院後墓

父裕之

母蔡氏

室班氏思戸金雍正二年甲辰十一月二十一日生乾隆四十七年壬寅六月初五日卒號妙涼享年五十九

[2]「桐」版による「首里系家譜」の一部。(*なお、本出力は「桐」データを「DB Pro」に変換したものである)